

文化コンテンツ倫理概念研究：道德懷疑主義を中心に

周起煥(韓国外国語大学校)

1. 初めに

いかなるテーマについて発表された著書、論文、記事の数がその対象の重要度の指標であれば正しいか正しくないかの問題、すなわち倫理という概念は、人類全体をひっくるめて最も緊急の問題であることに異見がないだろう。C. I. ルイスの「この世界で、そしてすべての人生において、何が正しいかを決定することよりも重要なことはない¹⁾」という命題が、現在でも依然としてその有効性を担保されているということだ。このような正しいか正しくないかの問題について、21 世紀問題の中心に文化コンテンツがあるという診断は飛躍ではない。芸術と産業、技術などの融合と創造を通じて誕生した文化コンテンツ²⁾は、それが指す広義の指示体群が形成されたにもかかわらず、大部分は正しいか正しくないかの根の土台の上に存在し、問題渦の中心部を形成している。³⁾

このような現象について、文化コンテンツに関連する倫理問題は具体的に議論されていない。もちろん、応用倫理次元で接近し、ある実践的、規範的倫理を研究する試みは適確であるが⁴⁾、それ以前に核心となる道德概念に対する認識論的、存在論的根幹を準備していなければ、すなわちメタ倫理学(meta-ethics)に関連した議論を扱わなければ、今後関連倫理の方向性を担保できないだけでなく、一つの整合的な体系としての文化コンテンツ倫理へと進むことに困難があるだろう。⁵⁾そこで、本研究は文化コンテンツの正否の基準点を調べる前に、その根幹となる倫理の概念的基盤を固める作業を行う。

2. 正否の理論：道德懷疑主義

メタ倫理学は、道德の存在論的問題と認識論的問題に対する観点に基づいて、大きく二つの点で概念に近づく。⁶⁾まず、道德が客観的な事実として存在し、実際の世界の一部を形成しているため、私たちがそれを信じるのか、信じていないのかとは無関係に客観的に存在すると信じる実在論(moral realism)、そしてそれに対する反対主張である反実在論(moral anti-realism)。そして、道德の存在とは別に、道德的発言や主張がどのような真理値を持つことができるかどうかについての議論を中心に、真理値形成を肯定する認知主義(cognitivism)と否定する非認知主義(non-cognitivism)に分かれる。私たちの直観によれば、道德実在論と認知主義が緊密な関係を結び、反対に反実在論と非

¹⁾ C. I. Lewis, The Ground and Nature of the Right, Columbia University Press, 1955, p. 27.

²⁾ 文化体育観光部、放送・通信融合時代の文化コンテンツの重要性、2014 年(ソウル:文化体育観光部 2014) p 5.

³⁾ 人間のすべての行為が倫理的価値評価が可能な対象であるためだ Peter Singer, A Companion to Ethics, Oxford, UK: Blackwell Reference, 1993, p. 5.

⁴⁾ 例として生命倫理として動物芸能の視聴、ディープフェイク問題などがある。

⁵⁾ 現在マッキー、道德懷疑主義と文化コンテンツに関連して望んだ研究の場合、韓国とイギリス(creative industry)の文化産業に関しては検索ならず、アメリカ(entertainment industry)に関してのみいくつか存在する実情だ。

⁶⁾ 本稿ではセイヤー・マクコード(Sayre-McCord)のメタ倫理学分類基準に従った。G. Sayre-McCord, Essays on Moral Realism, Ithaca, N.Y: Cornell University Press, 1988, 参照。

認知主義が関係を結ぶようだが必ずしもそうではない。むしろ反実在論と認知主義が緊密に結びつく場合があるが、本稿で中心となるメタ倫理学理論である道德会議主義がそうだ。道德会議主義は反実在論、すなわち道德という概念がないと主張するが、代わりに認知主義的接近、すなわち道德が社会内の客観的な合意が可能であるという論旨を主張する理論である。1977年、オーストラリアの哲学者マッキーが本『Ethics: Inventing Right and Wrong』で「客観的な価値は存在しない⁷」という文章で開かれた道德懷疑主義 (moral skepticism) は、道德客観主義 (moral objectivism) に収束される大概の哲学者が主張した過去の倫理に誤りがあるという反省を加える。

マッキーは客観的な道德について探求し続けると、それがあると考えるのが偽りであることに気づき、仮にその存在を肯定し、道德を想定しておくことが社会的に模範的である限り、我々はその客観的な存在を信じなければならない理由はないと主張する。このようなマッキーの主張は誤差論と呼ばれています。誤差論の核心は、既存の道德議論が黙示的にあるものを客観化させておき、あるいは客観化を要求したまま理論を展開するが、その要求と黙示的な規定ともに実質上、客観的ではないということだ。マッキーは、誤差論を幽霊の家に例え、人々が道德について話すのは、まるで人々が幽霊の家に住んでいる幽霊について話しているのと似ていると説明する。つまり、それをすでに客観的に想定して論じているということだ。しかし、幽霊の家には実在する幽霊はないので、それに対していくら論理的かつ整合的な理由作業が行われる限り、幽霊が存在するという事実とは別であり、幽霊の存在に対する実質的な担保も成されない。したがって、仮に道德が私たちの言語と思考の中に深く染みわたっている限り、道德が一陽的に存在するという主張とは別のものだ。

3. 誤差論の3つの議論

マッキーは、誤差論を相互補完する3つの主張で議論した。第一に、道德が客観的に存在しないと主張する議論は、相対性議論 (the argument from relativity) だ。相対性の議論とは、あらゆる場所の人々が伴う普遍的、客観的な道德法則が存在しないため、それが存在しないという主張である。⁸すなわち、道德的不一致が存在することに客観的な道德が存在しないという単純な議論であるが、これらの倫理相対主義的観点に対して、道德実在論者の側面で、すなわち文化間の倫理法則の不一致が普遍的な倫理法則の不在に対する論理的な根拠にはならず、ひいてはそのそれぞれの変異が客観的道德の地域的変容であるかもしれないという主張で、たやすく反論が可能だ。もちろん、マッキーはこのようなメタ正当化 (meta-justification) に反論するが、それもやはりこの議論を決定的だと主張しない。相対性の議論は、論争ではなく、これまでの普遍的で客観的な道德の概念を提唱している客観主義者の主張について、いくつかの隙間を形成する議論に近い。そしてその隙間を掘り下げてそれらを細撃するのは、まさに次の論証、奇異性論証だ。

マッキーは、奇異性論証 (the argument from queerness) によって、道德を含むあらゆる価値が独立して普遍的で客観的な存在を持つことができるという仮定の不適切さを実証しようとした。⁹ 議論を粗く要約すると、客観的な価値がないのに、客観的な価値の存在を想定して議論を進めることが奇

⁷ J. L. Mackie, *Ethics: Inventing Right and Wrong*, Penguin, 1977, p. 15.

⁸ Ibid., pp. 44-5.

⁹ すべての価値が客観的ではないというマッキーの主張は、文化コンテンツのような他分野への議論の拡大の可能性を包含する

妙だということだ。奇異性論証は、道德概念の存在論的(ontological)、認識論的(epistemological)議論で、既存の道德に関連する形而上学を正確に狙い、その「奇妙な道德」の例として、プラトン、シジウィック、カント、道德客観主義者を 直接批判する。

奇異性の議論は2段階で行われる。まず、認識論的な点で直観主義者と客観主義者を批判する。マッキーはプラトンを例に挙げ、彼のような二元論的道德観念を主張する哲学者は、道德という実在に触れるような奇妙な種類の直観が存在するという信念を与え、必要以上に拡大解釈されるようにすると主張し、こうした直観を信じる直観主義者らはその存在や方法について明確な証明が要求されるが、その能力に関連する証明の例は帰納的に提示されたことがないと批判する。これが客観主義者に対する批判として広がることは、マッキーが「直観主義者らの(倫理的)主題が最終的に客観主義者の価値観を受け入れる¹⁰⁾」ためであり、 反対に直観主義が、客観主義者らが道德を把握する方法で取ることができる唯一の道だからだ。¹¹⁾したがって、マッキーにとって客観主義は直観主義の他の形態にすぎない。¹²⁾

さらに、マッキーは道德の存在論的側面に批判を与える。もし道德があると仮定するなら、一般的な能力ではなく特殊な「直観でしか把握できない」道德の原形は科学的に、あるいは日常的に存在する「宇宙(経験世界; universe)内のどんなものとも全く違う、非常に 奇妙な種類のもの¹³⁾」と逆説する。マッキーは、道德が本当に客観的な価値として存在するならば、その存在の根拠に客観的規定(objective prescriptions)が必要であることを要求する。存在論的には、認識論的に他の物体のような経験条件を備え、それを実際に知ることができなければならないということだ。¹⁴⁾

それならば我々には一つの疑問がある。なぜこれまで道德の普遍性、客観性を多くの学者が、人々が肯定してきたのだろうか。最後の3番目の投影論証(the argument from projection)がそれに対する疑問を解消してくれる。投影論証は、私たちが道德を客観的なものと考えてるのは事実に基づくというより、個人の主観的信念を外部世界投影しようとする本能的な傾向の結果だという主張だ。¹⁵⁾マッキーはこの主張の根拠を彼の思想的根拠を占めるヒュームから持って来た。ヒュームは道德が何らかの論理的な構造を持っていることは認めるが、その本質を決定することは最終的に感情の投射だと見た。マッキーはこのようなヒュームの立場を受け入れ、道德への客観性の付与が感情的な誤り(pathetic fallacy)、すなわち道德が客観的であると考えたい私たちの主観的感情が実際には何の関係もない道德概念に投影されたと主張する。このような傾向性、すなわち投影心理のおかげで、私たちのほとんどがこれまで客観的な道德価値があると「錯覚」したということだ。

マッキーは、3つの議論が支持する誤差論を通じて、实在論者の形而上学的主張を説破しようと試みる。しかし彼が道德なんてないから人類がホブズの闘争状態に移行されると主張したり、道德議論が無意味だという道德虚無主義に帰結するわけではない。強調するが、マッキーは道德的合意が可能だと見る道德認知主義者だ。誤差論と提示された3つの論証を通じてマッキーが最終的に主張しようとしたのは、道德は普遍的、客観的に存在するのではなく「発明」に近いということだ。私たちは

¹⁰⁾ Ibid., p. 38.

¹¹⁾ Ibid., p. 39.

¹²⁾ Ibid., p. 38.

¹³⁾ Ibid., p. 38.

¹⁴⁾ ユン・ファヨン、「誤差論と準实在論」、『哲学的分析』22、韓国分析哲学会、2010、143 ページ

¹⁵⁾ L. Mackie, op. cit., p. 42.

個人相互間の関係を規制し、人々が互いに相反する行動をする場合、これを調整するために道德の発明を必要とする。この水準で要求される妥当性が私たちの道德判断に求められる権威を与えることであり、いかなる理想的で絶対的な価値としての道德概念が存在するものではない。マッキーの理論の意義は、倫理を第一段階（first-order）、合意可能であり、文脈内で客観的に通用できる道德と第二段階（second-order）の道德、すなわちすべての制約を越えて普遍客観化されることできる道德価値に区分して概念を実証的に解いたということだ。¹⁶ マッキーは第一段階の道德次元で倫理概念を自ら合意点を絶えず刷新、再発見しなければならないと主張する彼の理論は一定の実用主義的でもある。

このようなマッキーの誤差論（メタ倫理学）は、道德判断の本質にたいする概念的な研究であるため、倫理全体の枠組みを構える根幹として機能することができる。また、前者の議論が応用倫理学への拡張性を内包するという点に加え、先に説明したように、マッキーが認識主観とは別に存在する「すべての」客観的価値を否定したという点を踏まえ、文化コンテンツをテーマとした倫理論議もやはりこのような拡張性の中に含まれる。しかし、道德の概念が利害関係が幾何級数的に増えた現代にも実証的に、特にその範囲や概念的拡張が爆発的になされた文化コンテンツ領域にも依然として適用できるかどうかについて検証の必要性はある。本発表の限られた分量で筆者が行った検証の説明を簡単に述べると、筆者の場合、このような拡張可能性を肯定し、その根拠で各3つの議論を拡張させたが、まず奇異性議論の場合、倫理学界全般に与えた波長のために、これに対する学問的批判と論争が哲学の領域で熱烈に行われたが、奇異性議論に対する決定的な反論はなされなかった。そのため、マッキーの主張が依然として有効な意味を持っているという点。相対性の議論の場合、それが理論的には決定不全状態（underdetermination of theory）であるため、現代に相対性が重視されているという側面を考慮して、依然として有効性を主張することができる。¹⁷ 投影論証は事実、人間像についての議論で、その基底をなしているヒュームの理論が文化コンテンツの消費者研究（行動経済学）にも根幹となっているが、消費者、生産者と区分線がますます曖昧になっているという点¹⁸で文化コンテンツ研究にヒュームの理論を融合することは飛躍がないことで議論を拡張することができる。したがって、マッキーの道德懐疑主義は、文化コンテンツ領域の倫理に拡張することができる。

参考文献

- Lewis, C. I., *The Ground and Nature of the Right*, Columbia University Press, 1955.
Mackie, J. L., *Ethics: Inventing Right and Wrong*, Penguin, 1977.
Sayre-McCord, G., *Essays on Moral Realism*, Ithaca, N.Y: Cornell University Press, 1988.
Singer, Peter, *A Companion to Ethics*, Oxford, UK: Blackwell Reference, 1993.
W. V. Quine, “On the Reasons for Indeterminacy of Translation”, *The Journal of Philosophy*,

¹⁶ Ibid., pp. 15-7.

¹⁷ クワインによると、単に感覚経験にのみ依存する理論は、真と偽が論理的に決定不全状態である。なぜなら、経験的根拠は一つの事実（陳述）だけに等値するのではなく、複数の事実（陳述）と関連があるため、一つの同じ経験資料で支持される理論が論理的に無数に多いことがあるからだ。彼は、これらの経験に基づく理論の真理値が決定される現象について、合理的な推論ではなく実践的な推論の面で、すなわち私たちの感覚経験に基づく信頼、問題の接近方法の容易さなど、個々人の解釈体系が介入されたと主張する。W. V. Quine, “On the Reasons for Indeterminacy of Translation”, *The Journal of Philosophy*, vol. 67, 1970, p. 179.

¹⁸ ヴェルターベンヤミン、「技術複製時代の芸術作品」、『技術複製時代の芸術作品／写真の小さな歴史ほか』、道、2007、134-9ページ。

vol. 67, 1970, p. 179.

발터 벤야민, 「기술복제시대의 예술작품」, 『기술복제시대의 예술작품 / 사진의 작은 역사 외』, 길, 2007, 134-9 쪽.

문화체육관광부, 방송·통신 융합 시대의 문화콘텐츠의 중요성, 2014.

윤화영, 「오류이론과 준실재론」, 『철학적분석』 22, 한국분석철학회, 2010

(翻訳責任者：関一美)